

「賢明な者たちは理解する」

ダニエル 12 : 4 - 13

June.6.2021

ダニエル 12 : 4 - 13 (パワポ)

Preface

いよいよ、ダニエル書最後の聖書箇所となりました。

ここまでダニエルは、国々の栄枯盛衰、権力者たちの移ろい、そして、主なる神様以外に絶対的なものなど存在しないということを、啓示を通して示されました。

また、栄枯盛衰や移ろいのたどり着く先は、現存する歴史の終末であり、その終末に至るまでにはかつてなかったほどの苦難があると教えられました。

さらに、その終末の時には、永遠のいのちに入る人たちの復活と永遠の処罰に処せられる復活とがあると教えられました。

そして、先ほどお読みした4節では、

ダニエル 12 : 4 (パワポ)

「ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、この言葉を秘めておき、この書を封じておけ」という言葉をもって、「ここまで語られた啓示の言葉をしっかり保管し、この啓示の言葉が成就するのを見守りなさい」と命じられました。

なぜならば、時が満ちれば、この真理の言葉を人々が追い求め、探し回るようになるからだと言うのです。

人々は知識が人を幸いにすると思い求め、知識を情報化し、情報化した知識を蓄えることに救いがあると追い求めるけれども、その神を抜きにした知識の果かなさ、空しさ、虚無に気付く人々が、真の知識を追い求め、神の啓示の言葉を探し回る時が来るから、その時いつでも提供できるように与えられた神の言葉をしっかりと守り、保管し、あなた自身が神の言葉を生きなさいと命じられたわけですから。

Part One

以前も少しお話ししましたが、私たちは今、人工物が天然物の量を超えるような時代に生きています。

人類の歴史6000年だか、1万年だかよく分かりませんが、この100年間の間に、神の造られし美しい自然が人間の手によって淘汰され、支配され、破壊されてついに、人間の手によって作り出された人工物が天然物の量を上回るというとんでもない事態を生きています。

そしてもし、人工物こそ人間の知恵と知識の粹だと誇り続け、このままの勢いで人工物を作り続けることを辞めることが無ければ、2040年には、人工物が天然物の3倍の量になるそうです。

そんなこと考えられますか？

人工物と天然物の比率が1対1になった今、私たちどんな状態に陥っていますか？

オーストラリアにタスマニア島という北海道の80%の大きさになる島がありますが、人工物の増加に伴う温暖化によって水温が上昇し、栄養分豊富な冷たい水が流れ来なくなって、この数十年間で、豊かな巨大昆布の森が95%消失してしまったそうです。

シュノーケリングやスキューバダイビングをなさったことのある方はご存知だと思いますが、海中の昆布などの海藻は、陸上の森のようでたくさんの魚や生き物たちを養う命の園で、とても美しいのですが、その海藻が無くなって海の中の生態系が完全に崩れてしまいました。

私自身毎週海に入っていますが、サーフィンを始めた14年前よりも、海水温が冬でも少し温かいかなあと感じる程に、海水温上昇が身近になっています。

そして今、私たちが直面している感染症の問題も、人工物によって天然物の破壊が進んでしまったがためのものだとも言われています。

では、このような事態になることを聖書は傍観していたのでしょうか？

そんなことはありません。

色々な聖書箇所で、何度も何度も警告をしてきました。

神の言葉を守り、神の言葉に従って生きるならば、あなたがた人間のみならず、動植物たちも平穏に生きることが出来ると仰って下さいましたが、

神の言葉を守らず、被造物に対する慈悲や思いやりや寛大さも忘れ、ひたすらに自分のために生き、自分の思いを成し、自分にとって気持ちのいいことだけを追求していくような生き方によって、今、自分で自分の首を絞めているようなことになっています。

Part Two

先月の早天祈祷会で出エジプト記を学んだのですが、4000年前に書かれた出エジプト記の内容が、21世紀の現在の姿をしっかりと予見していることが見えてきます。

出エジプト記 23 : 10 - 11 (パワポ)

今ここで、神様は、イスラエルの民たちにこれから入っていく約束の地に置いて、農業を営みながら歩いていくことになるけれども、必ず守らなければならないことがあると言います。

それは、6年間畑を耕し作物を収穫したならば、7年目にはその土地を休ませ、自然に生え出て来た作物は決して収穫してはならず、貧しい人たちや野の生き物たちの食べ物にしなければならないと仰るんです。

大量生産・大量消費を目的に農業を営むのではなく、分けること、分かち合うこと、必要以上に土地を疲弊させないこと、必要以上に作物を生産しないこと、そして何よりも、自然の中の営みであることを忘れずに、動植物との共存、生態系の保全を決して忘れてはならないとアドバイスをします。

さらに12節です。

出エジプト記 23 : 12 (パワポ)

6日間一生懸命に働いたら、必ず7日目には休みなさいと命じます。

何のためですか？

働き手のためですか？

もちろんそれもあります。

しかし、それ以上に、一緒に働いている牛やロバが休めるようにするためです。

家畜だと、畜生だと、息のない無機物を乱暴に扱うようになりふり構わず扱って良いのではなく、彼ら家畜にも敬意を払い、仲間として配慮し、息をつかせるようにするためだと言います。

さらに19節です。

出エジプト記 23 : 19 (パワポ)

あなたは子やぎをその母の乳で煮てはならない。

この言葉は、レビ記、申命記と聖書に計三回も出てきます。

イスラエルの民たちが入っていくカナンの地の住民たちは、子やぎをその母の乳で煮て食したり、偶像にいけにえとして奉げていたようですが、神様は、イスラエルの民たちにこれを禁じます。

「どんなにそれが、味覚をかき立てるものだとしても、子やぎを母やぎの乳で煮るなんていう惨たらしいことは、神がお造りになった自然の道理に反する」と言うのです。

子やぎにとって母やぎの乳は、栄養分であるばかりでなく、慰めであり、癒しであり、守りであり、安らぎであり、母親の愛そのものです。

母やぎの乳で子やぎを煮るなんていう愛情のかけらも感じられないような神の造られし自然の道理に反する行為を、神様は断固として反対します。

「物事を進める時の動機や基本姿勢が愛情であるのか？」ということを、神様は問うわけです。

Animal Welfare（動物福祉、家畜福祉）なんてことが、ここ近年叫ばれるようになりましたが、聖書では、とうの昔に、4000年前から言われています。

いやもっと言いますと、創世記1章の時から語られています。

そして、このような被造物に対する配慮と共存意識が込められた神の言葉を守るならば、どうなるのか？

出エジプト記23：25（パワボ）

「あなたがたの神、主に仕えなさい。」

主に仕えるということは、語られた主の言葉を守りながら生きるということです。

そして、語られた主の言葉を守りつつ生きるならば、パンと水が祝福され、病気まで取り除かれると言います。

で今、私たちが直面している逼迫した問題は何ですか？

神の言葉もへったくれもない、自然との共存もへったくれもないところを歩み、一方でパンが溢れ、もう一方でパンが無く死んでいくような事態を前にしても、国境だ、国益だ、先進国だ、発展途上国だと言いながら、根本的な解決には至らず、

次世代の戦争は、水戦争で、「水資源争奪の最終戦争が始まった」なんて言うタイトルの本まで出版されるような時代に生きるようになっています。

そればかりか、全世界で気候変動による突発的な洪水が起こり、海面が上昇し

てそれまで住んでいた所に住めなくなるなんていう水被害が生じています。

地球全体で見ますと、全くもって、「パンと水を祝福する」というようなところを生きることが出来ていません。

そして、これらのしわ寄せの一つが、今現在私たちが直面している感染症です。

「あなたの中から病気を取り除く」のではなく、神の造られし動植物などの自然に対する愛情も、配慮も、敬意もなく回している「資本こそすべてだ」という価値観の中で、全世界の社会が回って、「あなたがたの中に病気が蔓延している」という事態を招いています。

「神の言葉を守り行わないならばどうになってしまうのか？」という御言葉の成就を、今、私たち人類は経験しています。

今になってやっと私たち循環型社会なんて言う言葉を使っていますが、神様が、出エジプトをしたイスラエルの民たちに4000年前に語った啓示の言葉こそ、現代に求められる姿勢・生き方で、現代にぴったり当てはまる最先端の言葉です。

聖書の御言葉は、古めかしい、今の時代にはそぐわない、何だかわからない宗教本などではありません。

時代も空間も超越した、どんな時も、どんな状況でも、最優先で守るに値する最先端の言葉です。

このような神の言葉を、ダニエルは、「終わりの時までしっかりと守り、その言葉の成就を見守りなさい」と言われたわけです。

そして、今、私たちにも言われています。

クリスチャンでさえ、物事の答えを聖書に求めようとせず、人の言葉や、人の書いた本や、人が発する情報や、自分の感覚や、自分の経験に求めようとする時代、それが、今の終わりの時代です。

だから、ダニエルに語られた「この言葉をしっかりと保管し、守り、生き、その言葉の成就を見守りなさい」という言葉が重く私たちに迫って来ます。

世の中のことはひとまず置いておきまして、

キリスト者にとって最も深刻な問題は、神の啓示の言葉である聖書の言葉が、その人生において最も大事な根幹になっていないということです。

神の言葉に感動もなければ、心が震え、涙が溢れることもなければ、御言葉を

通してイエス様に会うこともなければ、むしろ心が白けてしまい、よく分からないチンプンカンプンな書物です。

聖書は、多読することよりも、たった1節の言葉でもいいので、その言葉をもって神様と格闘し、神様の御旨が何なのかを探り、神様がその言葉を通して私に何を語ろうとしておられるのかを祈りをもって察し、そして教えられたことを実践することの方が、遥かに大事で、それこそ聖書を読んだことになります。

聖書の言葉に没入し、深く入り込むことなくして、どんなに聖書をたくさん読んだところで心を打ちませんし、イエス様に会うこともありません。

たった1節でもいいので、聖書の御言葉をもって、神様と格闘してみてください。ダニエルは、そうしました。

Part Three

そんなダニエルにイエス様が現れ、言葉をかけてくださいます。

5－7節を見てみましょう。

ダニエル12：5－7（パワポ）

今、ダニエルはチグリス川のほとりで、幻の内にこの啓示の言葉を与えられています。そのチグリス川のこちら岸とあちら岸にそれぞれ御使いが立ち、そして、川の水の上にいる亜麻布の衣を着た人を見ます。

以前も見ましたが、黙示録にある足まで垂れた衣を召しておられるイエス様の姿から洞察するに、この亜麻布の衣を着た方も主イエス様だと思われます。

イエス様に会ったダニエルは、「あなたは今、私に世の終わりとそれに伴う信仰者たちの苦難についてお示しになりましたが、それはいつ起こりいつ終わるのでしょうか？」と、質問を投げかけます。

すると、イエス様は「一時と二時と半時の内に起こり終わる。そして、その終わりは、聖なる民、信仰者たちがその信仰ゆえに経験する激しい迫害と苦しみの終わりをもって、すべての言葉が成就する」と答えてくださいます。

ここに出てきます「一時と二時と半時」というのは、イスラエルの民たちを苦しめたアンティオコス4世エピファネスが、エルサレムにおける神殿礼拝を禁じた B.C.168 年12月15日から、エピファネスの死とともに、神殿礼拝が回復した B.C.165 年12月25日までの約3年半のイスラエル民族にとっての艱難の時を指しているとも言われますが、

もっと広い意味で、世の終末に至るまでの時を抽象的ではありますが、指し示

していると解釈できます。

いずれにしろ、今、ダニエルに現れたイエス様が教えてくださっているのは、信仰ゆえに苦しみを通ったキリスト者たちが、神によって報われる時が来るということです。

そして、前回のメッセージの時も話しましたが、ここで重要なのはいつなのではなく、確実に来る終末を前にしてどう生きるのかが問われています。

8節以降のイエス様の言葉がそれをよく表しています。

Part Four

ダニエル12：8－10（パワポ）

ダニエルは、「今語られた言葉が、理解できません。どういうことなのか詳細に教えてください。」とさらに質問を投げかけたところ、イエス様は、「ダニエルよ、行け」と言います。

詳しい説明はなく、ただ「行け！」と仰います。

あれだけ敬虔な信仰者であり、3週間の断食祈禱をしていたダニエルでさえも、神の啓示の言葉が詳細には分かりませんでした。

で、そんなダニエルにイエス様は何て仰るかと言うと、「それで十分だ！ それぐらい知っていれば十分だから、あなたはあなたの日常に、あなたの人生の現場に帰りなさい。そして、キリスト者として生き抜きなさい。

また決して、与えられた神の言葉を理解できないからと言って御言葉から離れるのではなく、与えられた御言葉が変質しないように守り、時に適って成就していく御言葉の達成を見守りなさい」と、仰るんです。

さらに10節を見てもみると、

ダニエル12：10（パワポ）

理解の出来ないダニエルを放っておかれるのではなく、「神の手によって練られた賢明な者たち、つまり、神を畏れ敬い、神がお与えくださる知恵に頼る者たちは理解するようになる」とも言ってくださいます。

神様は今、すべてのことをいちいち、詳細に教えてくれるわけではありません。

「理解できない」と言うダニエルに対して、神様が、「じゃあ、理解させてあげよう」とは仰らずに、「ダニエルよ、行け」と仰います。

「理解出来たから、行け」ではなく、「理解出来なくても、行け」と仰います。

だからと言って、「語られた啓示の言葉を、あなたは金輪際理解出来ない」とは仰らず、「賢明な者たちは理解する」と仰ってくださいます。

つまり、「ダニエルよ。あなたは、わたしの目から見て明らかに賢明な者であるから、理解出来る時が来るから安心して出て行きなさい」とやんわりと示してくださっているわけですね。

物事には、時があります。

理解出来る時があり、理解できない時があります。

読み解ける時があり、読み解けない時があります。

人のアドバイスが耳に入ってくる時があり、人のアドバイスが耳に入っていない時があります。

親の助言が鬱陶しく戯言のように思える時があり、親の助言が正しかったと思える時があります。

そして、大概、理解出来、読み解け、耳に入り、正しかったと思える時は、困難を通り、自分の力で生きることに関界を感じ、自分以外の人誰一人として批判出来るような人はいないというヒリヒリするような経験をした時です。

また、これと同じように、神の言葉が見えない時があり、見える時があります。

神の言葉なんかわけの分からない何の力にも感じない時があり、神の言葉が慰めであり、救いであり、オアシスであり、癒しであり、食事であり、滋養強壮であり、真理であり、すべての答えであると思える時があります。

そして、大概、神の言葉が見え、神の言葉が慰めであり、救いであり、オアシスであり、癒しであり、食事であり、滋養強壮であり、真理であり、すべての答えだと思える時は、

あれほど世の言葉や人の言葉に魅了されていたのに、「こんなにも冷めるものなのか」と冷静に思ってしまうほどに世の言葉に冷め、

美味しい食事をしても、いい運動をしても、良い出会いを経験しても、良いと言われる知識を得ても、役に立つ技術を体得しても、病が癒されても、小さなことに小さな幸いを覚えることが出来ても、何だか心が、心の奥底が満たされず、オロオロし、ガタガタし、イライラし、まとわりつくような不安に苛まれ、

結局どこにも行く当てもなく、神の前に頭を垂れ、涙、鼻水を流しながら、祈った時です。

今、理解出来ることが、すべてではありません。

これから理解できることがあります。

そして、「これから理解できるところ」へと導かれるためには、私たちの成す

べき信仰的責任があります。

Part Five

テモテへの手紙第二 3 : 1 2 (パウロ)

迫害を受けるほどに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願い生きること、それが、私たちキリスト者の信仰的責任です。

では、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きるとは何でしょう。

テモテへの手紙第一 6 : 3 - 1 9 (パウロ)

これが、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きるということです。

今の世で富むことを目的に生きるのではなく、来るべき世において立派な土台となるものを蓄え、まことの命を得ること、これが私たちキリスト者の信仰的責任です。

しかし、責任だからと言って、私たちの力で成すものでもありません。

その過程すべてが、主の慈しみと哀れみと恵みです。

私たちは、キリストと共に天の王座に就く王に相応しい品性を諦めず、この与えられた地上の歩みを用いて練習し、習得させていただくのです。

ダニエルは、この信仰的責任を全うし、私たちも全うさせていただくのです。

でも、それすべて、私たちの功績ではなく、ただただ神の慈しみと哀れみと恵みです。

そして、全うさせていただいた賢明な者たちは、理解するんです。

主の言葉を、主の御手を、世界の成り行きを理解するんです。

テモテへの手紙第二 2 : 7 (パウロ)

主を畏れ敬い、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願い生きる、賢明な者たちに、すべてのことについて理解する力をお与えくださいます。

世の中、何も複雑なことなんかありません。

至ってシンプルです。

「神のものか、そうではないか」、これだけです。

「神のものに情熱を注ぐか、そうでないものに情熱を注ぐか」の違いだけです。

Part Six

ダニエル 12 : 11 - 13 (パウポ)

ここで言っていることも、ややこしいことはありません。

1290日とか、1335日という数字が、一見するとややこしく見せているように思えますが、ややこしいことはありません。

7節の一時と二時と半時を3年半とするならば、1290日は3年半+1ヶ月です。

つまり、この「+1ヶ月」が何を意味しているのかと言いますと、アンティオコス・エピファネスによるイスラエル民族への苦しめで、信仰者の苦しみが終わるのではなく、世の終末までキリスト者に対する苦しみが続くということを表わしているのでしょう。

でも、その苦しみを耐え忍び、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようとして、1335日に達する者たちは幸いだと言います。

1335日は、1290日に45日足した日数です。

そしてこの45日を、キリストが十字架に架かれ、復活し、天に昇られるまでの日数とする見方がありますが、

もしその解釈に倣うならば、苦難を耐え忍びキリストと共に死に、そしてキリストと共に生きる者たちこそ、幸いだと解釈できます。

第二テモテにある御言葉通りです。

テモテへの手紙第二 2 : 11 - 13 (パウポ)

真実なキリストと共に死に、耐え忍び、王となったキリスト者たちが至る所こそ、ダニエル書 12:13 です。

ダニエル 12 : 13 (パウポ)

「クリスチャンは、一体どこに向かって生きているのか？」という問いに対する答えが、まさにダニエル書 12:13 の御言葉です。

即ち、真実なキリストと共に死に、耐え忍び、王となったクリスチャンは、この世での安息に安住する者ではなく、来たるべき世における真の休息に入るために、神がお与えになさる割り当ての地に向かって歩む者です。

コロサイ 3 : 24 (パウロ)

キリストに仕えて歩む者たちには、御国という相続が約束されています。

今、ダニエルは、イエス様に太鼓判を押されました。

「あなたは、この世での信仰の戦いに打ち勝ち、来たるべき世において、神のお与えなさる相続、割り当ての地、御国を受け継ぐことが出来、そして、真の休息に入る」と、です。

Conclusion

これで、ダニエル書の講解は終わりです。

神様は現代において、この現代日本において、ダニエルを求めておられますし、ダニエルをお立てになっっています。

そして、そのダニエルたちを守るために、天の御使いを遣わしてくださっています。

ダニエルたちは、信仰を、世の富や栄華と引き換えにはしません。

地上での繁栄を目的に生きるのではなく、来るべき世に焦点を合わせて生きています。

だからと言って、決して世捨て人にはなりません。

だって、父なる神がひとり子イエスをお与えになったほどに愛された世ですから。

この世と調子を合わせることはしませんが、この世に愛情をもって接します。

そして、人々を自分へと導くのではなく、神へと、救い主イエス・キリストへと導きます。

たとえそれが、権力者であったとしても怯むことなく、神へと導きます。

そしてついに、「休みに入れ」と言われるところへと召されていきます。

ダニエル書に記されている真に幸いなダニエルの生き方に倣い、現代のダニエルとして主イエス様に期待されていることを感謝しつつ、共に歩いていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ダニエル書 12 : 12